

## 論文要旨

学位論文題目

「青年期王国維の文学的営為と清末雑誌『教育世界』 — 「人間」とその背景をめぐって—

氏名 小島 明子

王国維(1877～1927年)は国学者として著名な人物であるが、文学家でもあり、「紅樓夢評論」や「人間詞話」などはその業績として評価されてきた。しかし、文学分野では詩詞創作に対する注目度は低かった。その理由の一つとしては、文学史において専ら文学批評家として評価されてきたことの影響などが考えられる。

もちろん、詩詞の研究も一部ではなされてきたものの、青年期に関しては西洋哲学の研究者であったという観点ばかりが重視され、文学を生み出した作者の経歴や作者をとりまく周辺背景は詳しく調査されてこなかった。特に青年期に関しては、現存する一次資料が乏しいことから、不明な点が多かった。また、主に全集や文集などのテキストにより著作が受容されてきたなどの問題が存在した。

よって、本稿では、王の青年期の経歴を再調査の上、王が当時著述や翻訳を掲載していた雑誌『教育世界』を背景資料として中心に扱うことで、まずは詩詞に従事した頃の周辺環境について、可能な限り明確にした。

『教育世界』は、1901年羅振玉により上海で刊行されていた雑誌であり、1904年第69号以降、王はその主編の任に当たったとされてきたが、その関与状況は詳らかではなかった。

この問題は、およそ『教育世界』自体の全貌が不明であった点に存すると思われる。一部では『教育世界』の後半記事を王の業績と過大評価する傾向もあったが、これらの大半が著者や出典を記載していないことから、必ずしも王著ではなく、翻訳であるかもしれないとの理由により、むしろ軽視され、さらに研究されることはなかった。

そこで、本稿では、これまで王国維研究には不要と除外視されてきた『教育世界』未詳記事に注目し、これらの翻訳記事の出典を調査した上で、雑誌の全貌を浮かび上がらせるとともに、編集状況を明らかにした。その結果、日本明治期の教育雑誌等の流入が明らかとなったが、同時に、未詳記事の出典の一つである『教育時論』から、辻武雄という人物の『教育世界』への関与も判明し、これにより、王が主編ではなかったなどという事実が導き出された。

以上の『教育世界』の研究を前段階としてふまえ、青年期の王の経歴のあらましや環境を整理した上で、次に、当時の王文学においてキーワードとも言うべき「人間」の語について中心に再考し、その特徴を明らかにした。

王の「人間」はこれまでも先行研究において度々取り上げられてきたが、一般に『莊子』「人間世」や白居易「長恨歌」や李煜「浪淘沙令」詞の「天上人間」の例が典拠とされ、隱遁思想や厭世観と結び付

けられ論じられてきた。

しかし、そもそも前提となる「人間」の語自体に対する省察を欠いていたことから、本稿では古代より使用されてきた詩語「人間」を分析するところから着手し、白居易詩や李煜詞での用例を客観的に捉え直した上で、改めて王における「人間」の特徴を抽出した。

筆者の分析によれば、古代の詩詞では、確かに隠逸や現実逃避の意味合いを有し詠みこまれる場合が多かったが、王の「人間」の大半がそのような方向性をもたなかった。本稿では、その普遍性に着眼した上で、さらに従来指摘されてきた日本語「ニンゲン」の影響についても再検討を行った。また、王詞において多く見られる夢や自然と対比された用法に着眼し、詩や文学論とも照らした上で、隠遁の可能性や古代の用法との相違を確認した。

従来の研究では、詩詞の解釈が文学論の研究とは別に行われたり、詩詞の理解に当たっては『教育世界』に掲載された文学論が丁重に扱われない傾向があったが、批評と創作は相互関係を有していたため、文学論は詩詞研究に際しても、当時の文学観が窺える資料として参照する価値があるだろう。

清末といえば、新詩や口語文学の新興に伴い、所謂近代へのつながりとなる目新しさばかりが強調されてきたため、伝統形式がいかに継承されていたか、という点はこれまで十分に研究されてこなかった。しかし、王が『教育世界』をとりまく清末の独自のコミュニティの中で文学を創作・共有し、民間における重要性をも説いた業績は評価すべきであり、これは複雑な経歴を歩んできた作者にして成し得た部分を有している。

王は広く近代批評の先駆者と見なされてきたが、古典文学の継承者でもある。本稿ではこのような観点から、新旧交代の過渡期において、文学家の一人としても数えられる王の青年期における文学的営為の特徴を明らかにした。